# ご挨拶

国立女性教育会館女性アーカイブセンターは、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性や女性教育・女性施策等に関する過去の記録の収集・整理・保存・提供に取り組むとともに、さまざまな分野で「チャレンジした女性たち」を紹介する企画展示をシリーズで開催しています。

平成23年度に開催した「化学と歩む」からは、パイオニアのみならず、現在活躍する方々も紹介する「チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」として、内容を更に発展・充実させてまいりました。

シリーズ11回目となる今回は、2018年に発覚した医学部入試における女性差別を受け、医師・医学研究にかかわる女性たちをテーマとしました。パイオニアとして道を切り開いてきた女性たち、そして現在現場で活躍中の方々を紹介する資料を展示します。

増えてきたとはいえ女性医師の割合は約２割と、医学界はまだまだ男性社会です。医師となるためにさまざまな障害を乗り越えた女性たち、そして現在活躍の場を広げている女性たちの実践の軌跡から、男女共同参画社会の形成をより一層推進するためのヒントを見つけていただければ幸いです。

最後になりますが、本展開催にあたり、貴重な資料の利用についてご快諾いただきました方々に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

令和元年11月

独立行政法人国立女性教育会館
理事長　**内　海　房　子**

# 年表

| 年 | 事項 | |
|---|---|---|
| 1821 | エリザベス・ブラックウェル 生まれる | |
| 1827 | 楠本イネ 生まれる | |
| 1849 | エリザベス・ブラックウェル学位取得（世界初の有資格女性医師） | |
| 1851 | 荻野吟子 生まれる | |
| 1852 | 高橋瑞子 生まれる | |
| 1853 | | 浦賀にペリー来航 |
| 1864 | 生沢クノ 生まれる | |
| 1868 | | 明治維新 |
| 1871 | 吉岡彌生 生まれる | 津田梅子らが岩倉使節団に随行して渡米 |
| 1875 | | 東京女子師範学校設立 |
| 1884 | 高橋瑞子 済生学舎に入学（女性初） | |
| 1885 | 荻野吟子 医術開業試験合格（日本初の有資格女性医師） | |
| 1886 | 生沢クノ 医術開業試験合格（日本で2人目の有資格女医） | 東京婦人矯風会設立 |
| 1887 | 高橋瑞子 医術開業試験合格（日本で3人目の有資格女医） | |
| 1894 | | 日清戦争（～1895） |
| 1900 | 吉岡彌生 東京女醫學校設立 | 津田梅子が女子英学塾を設立 |
| 1902 | 前田園子ら 日本女医会を設立 | |
| 1903 | 楠本イネ逝去（76歳） | 専門学校令公布 |
| 1904 | | 日露戦争（～1905） |
| 1910 | エリザベス・ブラックウェル逝去（89歳） | |
| 1911 | | 『青鞜』創刊 |
| 1912 | 東京女醫學校 東京女子医学専門学校昇格 | 大正元年（7/30～） |
| 1913 | 『日本女医会雑誌』創刊、荻野吟子逝去（63歳） | |
| 1914 | | 第一次世界大戦（～1918） |
| 1919 | ニューヨークにて万国女医会（現・国際女医会）結成 | |
| 1923 | | 関東大震災 |
| 1926 | | 昭和元年（12/25～） |
| 1927 | 高橋瑞子逝去（75歳） | |
| 1939 | | 第二次世界大戦（～1945） |
| 1945 | 生沢クノ逝去（81歳） | |
| 1947 | | 日本国憲法、学校教育法施行 |
| 1952 | 東京女子医科大学開校 | |
| 1959 | 吉岡彌生逝去（88歳） | |

# 楠本イネ(1827-1903)
## ～日本初の西洋医学を学んだ女医～

### 荻野吟子以前の女性医師

明治時代以前は、医師として開業するのに資格は必要ではありませんでした。女医もいましたが、詳細がわかっている人は多くありません。海外では、エリザベス・ブラックウェル（1821～1910）が、アメリカの医学校を1849年に卒業して医学学位を得、世界で初めて医師と認められた女性として名を残しています。

### シーボルトの娘

楠本イネは、日本近代医学の父として知られるシーボルトと出島の遊女楠本たきとの間に、1827（文政10）年長崎で生まれました。翌年シーボルトは日本地図等の禁制品を入手していたことが発覚し、1829（文政12）年国外追放となります。

本を持つイネ
大洲市立博物館蔵

### 医師を志す

イネはシーボルトの娘として医師を志し、1845（弘化2）年シーボルトの弟子である伊予国（現在の愛媛県）の二宮敬作に医学を学びに行きます。さらに敬作に勧められ、備前国（現在の岡山県）の産科医石井宗謙に入門し、6年8か月を過ごします。その間に、石井とのあいだに娘のタダ（高子）が生まれました。

1851（嘉永4）年イネは25歳で帰郷し、阿部魯庵に3年間師事し、その後再び宇和島の二宮敬作のもとへ向かいます。1853（嘉永6）年にはペリーが来航し幕府に開国を迫り、翌年日米和親条約締約、その後イギリス、ロシア、オランダとも同様の条約を結ぶことになり、200年以上続いた鎖国政策が終わりました。1856（安政3）年、イネは敬作、三瀬周三（敬作の甥、医師となる。高子と結婚）とともに帰郷し、開業します。

日本を再訪したいと願っていたシーボルトは、1859（安政6）年、オランダ貿易会社長崎支店評議員の肩書を得て、息子アレクサンダーとともに再来日、32歳のイネは63歳の父と再会しました。その間、イネは蘭医ポンペやボードイン、マンスフェルトに師事します。シーボルトは1862（文久2）年に帰国しました。

### 東京で開業、宮内省御用掛拝命

1869（明治2）年、母たきが亡くなり、翌年イネは東京築地で産科医院を開業、大繁盛します。1873（明治6）年、46歳のイネは宮内省御用掛を拝命し、明治天皇の第一子の出産に立ち会います。

1877（明治10）年2月、イネは突然東京の病院を閉じ、大阪に向かいます。同年10月、周三が病で急死、残された高子とイネは長崎に戻りました。1884（明治17）年、産婆営業に免許が義務化され、イネは「産婆免許観察願」を長崎県令に提出します。1891（明治24）年64歳のイネは東京に移住、1903（明治36）年、76歳でその生涯を閉じました。

# 荻野吟子(1851-1913)
## ～日本初の公許女性医師～

### 自らの経験から医師を目指す

荻野吟子は俵瀬村（現埼玉県熊谷市）の名主の五女として生まれました。1868年17歳で豪農の稲村家の長男に嫁ぎます。しかし吟子は病気になり1870（明治3）年、19歳で離婚、大学東校（後の東京大学医学部）に約2年間入院しました。そしてその際に感じた、男性医師による診察・治療に対する羞恥や屈辱の経験から女医となることを決意します。

医籍登録当時

### 女性医師への道を切り開く

故郷に戻った吟子は学問を始めます。1873（明治6）年、22歳で上京し、国学者・井上頼圀（よりくに）の門下に入りました。そして1875（明治8）年24歳で、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）に第一期生として入学、1879（明治12）年に首席で卒業しました。当時女性を受け入れている医学校はなく、女医を目指す吟子は、伝手を頼り私立医学校・好寿院にようやく入ります。そして3年間の猛勉強により、1882（明治15）年、優秀な成績で卒業しました。しかし、医術開業試験の願書は、女であることを理由に却下され続けます。海外に行くことも考えていた吟子でしたが、日本の古代にも女医がいた文献（『令義解（りょうぎのげ）』）があることを内務省に示し、また多くの女性が医術開業試験を受験できるよう活動していたことから、1884（明治17）年、ようやく重い扉が開き、願書が受理されました。翌1885（明治18）年女性でただ一人合格、吟子は34歳で公許女医第一号となりました。

### キリスト教入信と女性の地位向上

同年5月、東京の本郷（現文京区）に医院を開業します。患者は日に日に増え、下谷に移りました。1886（明治19）年頃に洗礼を受け、東京婦人矯風会（現日本キリスト教婦人矯風会）に入会、キリスト教信者として社会運動にも熱心に取り組みました。

### 再婚、北海道へ、そして再び東京へ

1890（明治23）年、吟子は同志社出身のキリスト教伝道に燃える志方之善（しかたゆきよし）に出会い意気投合し、周囲の反対を押し切り結婚します。吟子39歳、之善26歳でした。翌年之善は、理想郷を建設するために北海道に渡ります。吟子は1894（明治27）年、後を追いました。開拓はキリスト教徒以外の入植者が入るようになり、理想郷建設は困難な状況となります。1897（明治30）年、吟子は瀬棚（現北海道せたな町）で開業します。その後之善は同志社に再入学し牧師となりますが、1905（明治38）年、病死しました。

吟子は姉友子の勧めで1908（明治41）年東京に戻り、新小梅町（現墨田区向島）で開業、姉と養女トミと暮らしました。1913（大正2）年6月23日、病により63歳の波乱に満ちた一生を終えました。

# 生沢クノ(1864-1945)
## ～公許女医第二号～

26歳のころ
深谷市提供

生沢クノは、1864（元治元）年、武蔵国深谷宿（現埼玉県深谷市）に生まれました。父良安は長崎でオランダ医学を修めた医師でした。父の働く姿を身近に見、また自分の頬の赤いあざを消したいという思いもあったのか、クノは医師になることを決意します。

1877（明治10）年、13歳で上京し、止敬塾で勉学を始めます。1879（明治12）年に荻野吟子が好寿院に入学したことに刺激を受け、1880（明治13）年、東京府病院の見習生となり、更に1882（明治15）年、私立東亜医学校に特別に入学します。当然学生は男子のみで、クノは断髪男装し、隣室で聴講でしたが、森林太郎（鷗外）らの指導を受け、熱心に勉学しました。

3年間の医学修業ののち、1883（明治16）年医術開業試験に願書を提出しますが、吟子同様、却下されます。しかし翌年、鉄の扉が開きました。クノは過労のため最初の試験は見送ることになりましたが、1885（明治18）年に前期試験、翌年に後期試験に合格し、23歳で公許女医第二号となりました。

医師となったクノは、郷里に戻り地域医療に尽くします。1932（昭和7）年68歳で退職後は平穏に過ごし、1945（昭和20）年6月、81歳で亡くなりました。

# 高橋瑞子(1852-1927)
## ～公許女医第三号～

東京女子医科大学蔵

高橋瑞子は1852（嘉永5）年、三河国西尾（現愛知県西尾市）藩士の6男3女の末子として生まれました。早くに両親を亡くし、苦しい生活を送ります。瑞子は、女性が自立できる職業として産婆を目指し、1879（明治12）年、群馬県前橋の津久井磯子に弟子入りします。その後東京の産婆学校・紅杏塾に入り、1882（明治15）年、30歳で産婆の免許を取得しました。

1884（明治17）年、女性に医術開業試験の門戸が開かれます。しかし女性が医学を学べる学校はありませんでした。瑞子は医師を目指し、東京の私立医学校・済生学舎の門の前に3日3晩立ち続け、その熱意に入学を許可されます。貧しい瑞子は産婆をして働き月謝を払い一月学び、また働いて、という生活を送り、1887（明治20）年、35歳で女性第3番目の合格者となりました。

東京・日本橋で開業し繁盛しますが、さらに勉強する必要性を感じ、1890（明治23）年、ドイツに留学します。しかしドイツの医科大学は女性に門戸は開いていませんでした。瑞子は下宿の女主人の力添えでベルリン大学医学部婦人科に客員として入ることができ、猛勉強をしました。1年後に体を壊し帰国、帰国後は復調し、また日本橋で開業します。60歳で潔く引退し、1927（昭和2）年2月75歳で死去。その遺体は瑞子の申し出により、東京女子医専で解剖されました。

# 吉岡彌生(1871-1959)と東京女子医科大学

## ～東京女醫學校創立、専門学校となるまで～

### 父の猛反対を説得し医師となる

東京女醫學校創立当時
東京女子医科大学蔵

吉岡彌生（旧姓・鷲山）は、1871（明治4）年、静岡県の漢方医の家に生まれ、2人の兄が医学校に通うという環境で育ち、自らも医師を志します。父の猛反対を受けるも粘り強く医学への希望を説き、1889（明治22）年18歳で上京。当時は内務省の医術開業試験前期・後期試験に合格すれば誰でも医師になれましたが、女性医師はまだ少ない時代。私立医学校・済生学舎に入学した彌生は、少数派である女子生徒が多くの男子生徒から差別を受ける現実に、女性が安心して勉強できる環境が必要と考えます。苦学の末、1892（明治25）年21歳で難関試験を突破し、日本で27番目の女性医師となりました。故郷に戻って父の診療を手伝いますが、ドイツに留学したいと考え、1895（明治28）年、再び上京。開業し診療を行う傍ら、東京至誠学院でドイツ語を学び始め、同年、院長・吉岡荒太と結婚しました。

### 日本初の女性医師養成学校　東京女醫學校を創立

1900（明治33）年、母校・済生学舎が風紀の乱れを理由に女子学生排斥に踏み切ると、彌生は女性が医師になる道を閉ざしてはならぬという使命感に立ち上がり、夫・荒太と共に東京女醫學校を設立します。彌生29歳のときでした。学校といっても、教室は至誠医院の一室をあてたもので、生徒は4人からの出発でした。翌年、学校を市ヶ谷中之町の屋敷に移し、1902（明治35）年、長男博人を出産します。翌年、現在もキャンパスのある河田町の、移転した獣医学校へ移ることができ、生徒たちは大変喜びました。1905（明治38）年、日露戦争が終わり、父や夫を失った女性たちや、また戦後の経済発展から働く女性が増え、翌年は多数の志願者が押し寄せてきました。そして創立から8年後の1908（明治41）年、ついに初の後期試験合格者を出すことができました。

### 専門学校昇格の許可を得る

1906（明治39）年医師法が施行され、1914年に医術開業試験を廃止し、医学専門学校の卒業生でなければ医師試験を受けられないことになりました（実際には医術開業試験は1916年まで存続）。開業試験の合格者を出した彌生は、1909（明治42）年から専門学校昇格の許可を得るため、文部省に何度も足を運び、学校や病院の設備を整えようと奔走しました。その甲斐あって、1912（明治45）年3月、東京女醫學校は東京女子医学専門学校へ昇格します。第一次世界大戦の後にも飛躍的に志願者が増え、医師試験合格者も着実に増えました。そして1920（大正9）年に文部大臣指定学校となり、卒業生は無試験で医師資格を得られるようになりました。

# 吉岡彌生(1871-1959)と東京女子医科大学
## ～大学昇格、その後の発展～

### 夫の死

1922（大正11）年、息子・博人が第一高等学校に入学し喜んだ同じ年に、最大の協力者であった夫・荒太は糖尿病を悪化させ亡くなります（享年55歳）。彌生は今までの二倍働かなければならないと決心しますが、幸い学校も病院も順調な発展の時代に進んでおり、義弟の正明の助けもあり、仕事は発展していきます。翌1923（大正12）年には関東大震災により病院を焼失しますが、焼け残った病院を買い取り患者が押し寄せました。

### 女性の地位向上のため幅広く活動

彌生は女性の地位向上にもつとめ、さまざまな団体の役職や、政府の委員も依頼され就任します。国外へも活躍の場を広げ、1928（昭和3）年にはホノルルでの第一回汎太平洋婦人会議に参加、1939（昭和14）年には、厚生省・文部省の嘱託として、欧米に医学教育・母子保護事業を視察に行きました。しかし第二次世界大戦後は、これらの活動が戦争協力とみなされ、1947（昭和22）年から1951（昭和26）年まで、教職・公職から追放されます。

### 念願の大学昇格

1945（昭和20）年、学校は空襲で焼失します。その再建と大学昇格のため、同窓会組織の至誠会が「大学昇格期成同盟」を組織し、募金活動を展開しました。大学昇格にあたっては共学にすることを勧告されますが、女性の社会的地位向上のための医学教育という創立趣意により、女子医科大学として存続を図ることになります。1951（昭和26）年、東京女子医科大学の認可がおり、翌1952（昭和27）年、81歳の彌生は学頭に就任、同年創立五十周年記念式典が行われました。

長年にわたり日本の女子医学教育に尽くした彌生は、1959（昭和34）年5月に彼女の志を継ぐ多くの卒業生たちに看取られながら88歳の生涯を閉じました。

### 東京女子医科大学― その後の発展

彌生の死後も大学は発展し、看護学校、看護学部、先端生命医科学センターなどが設立・開設されています。2009年には男女共同参画推進局を設立、2017年女性医療人キャリア形成センターと名称変更し、「女性医師・研究者支援部門」、「女性医師再研修部門」、「看護職キャリア開発支援部門」、「彌生塾」、「働き方の多様性を考える委員会」の従来の5つのプロジェクト部門に加え、「ダイバーシティ環境整備事業推進室」を設置しました。女性医師は出産、子育て、あるいは配偶者の転勤などで臨床現場を遠ざかり、復帰の道を断たれる場合がまだ多く、「女性医師再研修部門」では、相談者の出身大学を問わず復職の相談を受け付けています。その8割が学外からとなっています。また医学部における女性リーダーといえる女性教授の比率は、2015（平成27）年度14.7%から2018（平成30）年度17.9%へと着実に増えています。

# 公益社団法人 日本女医会
## ～女性医師の地位向上・ジェンダー平等を目指して～

### 設立のきっかけ

1902（明治35）年、前田園子（公許女医第12号）らの発起により、「女性医師の社会的地位向上と相互研鑽」を理念として創立されました。毎年春秋2回の例会を開催し、学術上の意見交換や情報交換を活発に行いました。

およそ10年を経て、会員が増え、分布も全国に広がり、会誌発行を望む声が高まり、1913年『日本女医会雑誌』を創刊しました（1958年『日本女医会誌』に改称）。翌1914年、第1回日本女医会総会を開催しました。

創始者 前田園子

### 現在の活動

現在も当初の理念を引き継ぎ、「福祉の増進ならびに地域医療等の社会活動」「国際交流と親善」を加えた3本柱で活動を継続しています。1969年に社団法人認可を受け、2002年に創立100周年を迎え、『日本女医会百年史』を刊行、2012年公益社団法人に移行しました。現在、女性医師支援、学術研究助成、国際女医会活動など11の公益事業を行っています。また、全国各地に支部があり、それぞれの支部においても地域に根ざした様々な活動を行っています。

1968年、日本における女性医師の育成の礎を築いた吉岡彌生の偉業を称え、その名を永久に伝えるとともに、女性医師が医学、また社会への貢献を図ることを目的とした「吉岡彌生賞」を設立しました。また1983年には、荻野吟子が日本の女性として初めて公に医師の資格を取得してから100年を記念して、独自の活躍をもって女性の地位向上や、市井の医療に著しい貢献をした女性医師を対象として「荻野吟子賞」を設立しました。また、2007年から国民の意識改革と女子医学生および若手女性医師の育成・支援を目的に「医学を志す女性のためのキャリア・シンポジウム」を開催しています。

日本女医会は国際女医会に加盟しています。国際女医会は、1919年に米国ニューヨークで設立された非政府、非宗教、非営利の最も古い国際的専門家団体の1つで、各国の女性医師で構成される国際非政府組織（NGO）です。現在51の国と地域の医師が参加し、3年毎に加盟国において国際女医会議を開催し、各国の女医が一堂に会して一定のテーマを討議するとともに、親睦を深めています。

2019年 国際女医会 創立100周年記念式典

# 前田佳子
## （泌尿器科医・日本女医会会長）
## ～チャレンジあるのみ！～

### 荻野吟子に感銘を受け医師を目指す

渡辺淳一著『花埋み』を読んで、荻野吟子の人生に感銘を受け、医師を志しました。東京女子医科大学医学部に入学、病院実習で移植手術によって第二の人生を手に入れた慢性腎不全の男の子を受け持ち、移植外科医になろうと決めました。「女は外科はやめたほうがいい」と反対されたものの、卒業と同時に移植を専門にしている第3外科に就職、6年間の研修期間で研修を共有していた泌尿器科に魅力を感じ、泌尿器科医になりました。

### 留学、人生の転機

1996年4月米国に留学し、アルバート・アインシュタイン医科大学腎臓内科の研究員となりました。タンパクの機能解析を任され、研究は初めてだったのであっという間に3年過ぎ、1999年9月までアメリカで生活しました。いろいろと学ぶことは多くて苦しくも楽しい3年半でした。

2007年、大学の附属青山病院に泌尿器科を設立するために派遣されました。はじめの3年間泌尿器科医は私1人で、チームで働くことや外部との連携の重要性を痛切に感じました。4年目からは3人となりできる治療や手術も多くなりました。総合医局長と病棟医長にもなり、全体をまとめる難しさも経験しました。

このまま働き続けてもいいと思っていた矢先、附属病院の閉院が決まり、大きな転機を迎えました。2016年4月、27年間勤務した東京女子医科大学を退職し、昭和大学に勤務することになりました。5月に理事を務めていた日本女医会の副会長に任命され、2017年3月第11代会長に就任しました。

### 社会貢献の重要性

歴史ある会のトップとして、今やるべきこと、これからやるべきことは何か、手探りの日々が続きました。そんな中、医学部受験の不正が発覚しました。調べて愕然としたのは、1995年以降の医学部入学生の女子比率は30％前半のまま20年以上が経過していたことです。医師としてだけでなく一女性として女性の地位向上のために社会貢献することの重要性を再認識させられました。国際目標であるSDGsは地球上の誰一人として取り残さないことを誓っており、私たちもこの世界基準に頭を切り替えていかねばなりません。

### チャレンジする女性たちへ

2019年の医学部入試は女子学生の合格率が上昇しました。昔を振り返って「ジェンダー平等でなかった時代があったのか!」とみんなが驚くような時代が必ず来ると信じたい。チャレンジあるのみ!

# 宮坂晴子
## （眼科医・日本女医会埼玉支部長）
## 埼玉県女性医師支援センター開業に携わって

### 父・姉の影響で医師を目指す

埼玉県鴻巣市で産婦人科を開業していた父を見てきたこと、同じ産婦人科に進んだ姉の影響で、高校から医師を目指す気持ちが芽生えました。両親も仕事と家庭の両立は大変だが頑張りなさいと応援してくれました。

### 埼玉医科大学総合医療センター眼科に入局

埼玉医科大学を卒業、外科系に進みたいと思っていました。開設したばかりの埼玉医大総合医療センターには女性医師が多く、説明会で話を聞き眼科入局を決めました。

### 「できる時に、できる事を、できるまで」

入局後は河井克仁教授の下「できる時に、できる事を、できるまで」をモットーに、忙しく充実した日々でした。その経験が原動力になっています。6年目に眼科の専門医試験を受け、1994年に鴻巣市で夫の耳鼻咽喉科と私の眼科で開業しました。

### 診療と育児の両立

長女出産の4か月後の開業で、母に協力してもらい、仕事と家事育児の両立に必死でした。自宅併設の医院で合間に子どもを見に行き、戻ってすぐ診察でした。日帰りの白内障手術で、患者さんから「良く見えるようになった」と喜んでもらえた時は本当に嬉しく、やりがいと充実感を感じました。開業して今年で25年目です。

### 埼玉県女性医師支援センターの開業 日本女医会埼玉支部長として

日本女医会に入会し、年齢も診療科目も違う女性医師と活動を行い、いろいろな方と出会い勉強させていただきました。2009年に埼玉県の委託事業で女性医師支援センター開設を女医会が任されました。診療の合間にメールで事務員とやり取りし、休診日は事務所で女性医師の復職支援などの相談業務や病院への求人情報の取りまとめ等を行いました。県内の病院に女性医師が育児と両立しやすい環境が整っているか、院内保育所や病児保育所の有無等を調査しました。

診察室にて

2013年に埼玉支部長を拝命し、2017年日本女医会全国大会総会を埼玉支部で開催しました。

これからも地域医療に貢献し、女医会や医師会を介していろいろな方との出会いを大切に、自らも成長していきたいと思います。

# 皆川智子
## （皮膚科・日本女医会青森県支部）
## Where there's a will, there's a way 意志あるところに道は開ける

### 祖父母の影響で医師を志す

小2の頃、医師になりたかった祖父に夢を託され、医師を志しました。当時の津軽は父親が出稼ぎにいく家が多く、車を運転する母親は少なく、家族を病院に連れて行くのが大変な家も多く、「将来、お医者さんになって往診する」と思い、勉学に励みました。また、祖母に「職業婦人」になるよう励まされました。

### 研究と診療、育児の両立

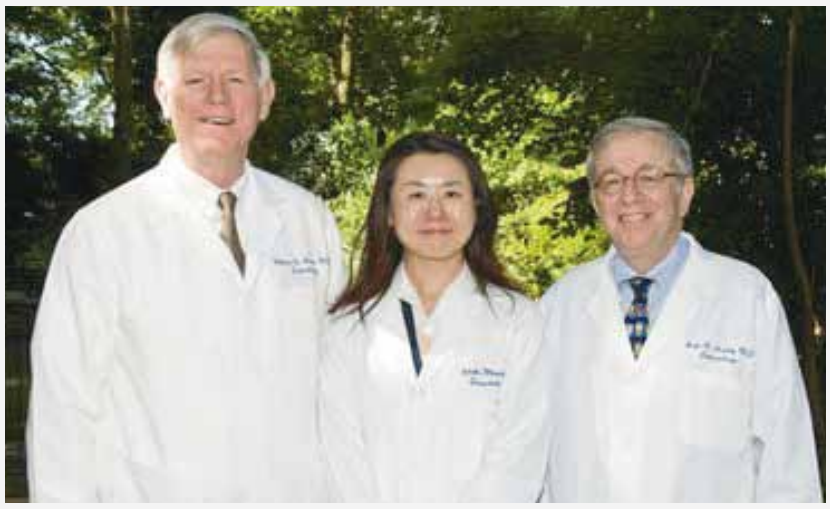
弘前大学医学部卒後、入局しました。皮膚科専門医を取得し、大学院修了後助教になりましたが、産前5週で退職、夫の実家で同居し、出産後は家事・育児に専念しました。夫の留学に伴い渡米、息子を保育園に預け、ペンシルベニア大学で研修を受けました。帰国後、息子を学内保育園に預けて医員で復帰、学会発表も再開。2013年に第2子出産後も保育園に預けて医員で復帰しました。2016年に弘前大学医学部附属病院の検査部助教に採用され、現在に至ります。科研費、日本女医会からの研究助成、弘前大の研究支援制度のおかげで、臨床研究や電子顕微鏡（対象に電子線をあてて拡大し、観察する顕微鏡）による研究を続け、支えてくださる先生方や家族のおかげで診療を続けています。

### 日本女医会での活動ー男女共同参画社会実現のための課題解決に取り組む

日本女医会に入会したきっかけは、2013年「“ママさん”をやめさせない」で、第2回提言論文を受賞したことでした。さらに2019年、女性医師の海外におけるグローバルな活躍の助成を目的とした第1回山本纊子賞を受賞しました。

日本女医会の発展ならびに社会にも貢献したいのですが、午前:皮膚科外来、午後:検査部でインフェクションコントロールドクター（ICD:病院感染対策を実践し、感染制御の専門的知識を有する医療従事者）として感染制御センター勤務で精一杯のママさん医師の私にできることは少なく、附属病院の再生医療委員会委員、男女共同参画委員会委員として青森県女性医師等キャリア支援連絡協議会、大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会などに参加しています。

私は後で振り返った時、大変だったが頑張ってよかったと思い、周りの先生や家族にも支えてあげてよかったと思ってもらえるよう、今何をすればよいか考え、実行し、細く長く皮膚科医を続けていきたいと思っています。



2010年留学中

# 天野恵子
## （循環器内科・性差医療）
## 女性外来のパイオニア

### 7歳で医師を志す

7歳のときに友達の祖母が亡くなり悲しんでいたところ、母から「あなたが医者になって皆が死なないように頑張ったら」と言われたことがきっかけで、医師を目指しました。せっかくなるのだったら日本一の女医に、と1961年東京大学理科Ⅱ類に入学、1963年医学部に進学します。循環器を専門とし、1967年に卒業、その後アメリカ、（ニューヨーク）、次いでカナダでレジデント（研修医）として働き、最先端の医療を学びます。

### 性差医療との出会い

帰国後の1974年、東大病院第二内科に入局します。3人の娘を育てながら懸命に働きましたが、教えた後輩の男性が助手になっていく時代でした。1982年、40歳のときに胸の中央が圧迫されるような痛みが毎日起こるという、女性の患者と出会います。狭心症を疑い検査をしますが、確定的な診断はできません。その後も似たような患者が何人も現れて困っていたところ、1985年の米国循環器病学会で「微小血管狭心症」という疾患を知ります。この病気は更年期女性に多いということで、アメリカではすでに取り組まれていた性差医療（gender specific medicine）の必要性に気づき、研究を始めました。そして50歳で自身が重度の更年期障害を発症、しびれや倦怠感に悩まされます。文献を読み、何度も著名な産婦人科にかかりますが、症状はほとんど改善しませんでした。また気のせい、更年期だから、と医師に病気と認められず苦しんでいる女性がたくさんいることもわかり、原因も治療法もよくわからない病気や不調をかかえた女性たちのための女性外来の開設を周囲に訴えていきました。

### 女性外来の開設

2000年末に鹿児島大学へ性差医療を学ぶセミナー講師に招かれ、女性外来を立ち上げようという機運が高まり、2001年5月に鹿児島大学病院に女性専用外来が開設されます。その4か月後、すでに意気投合していた堂本暁子千葉県知事の発案により千葉県立東金病院で女性外来が開設されると、予約が殺到しました。そしてその後数年で、数百か所の女性外来が設置されました。私が行っている女性外来では、まず予約時に患者のそれまでの病歴を振り返って書いたものを送ってもらいます。そしてそれをもとに一緒に考えていきます。自分の主治医は自分なのです。現在は埼玉県にある静風荘病院で、女性に多い慢性疲労症候群において、その多岐にわたる症状に脳の血流が関与しているのではないかと考えています。100歳現役を目指して、毎日とことん患者と向き合う日々を送っていきます。